平成14年度　ＮＩＥ実践報告

情報を集め、自分らしい分析をして、友だちにわかりやすい伝え方を工夫しながら、自分らしい発信ができる子どもの育成

～新聞やメディアを活用して～

長野県上田市立北小学校　波多腰　英　幸

１．はじめに

本校では以前から学校目標「花と緑と笑顔の学校」の実現に向け、広い校地、豊かな自然環境や地域の特色を生かして花や緑を育てたり、りんご栽培や大豆作りなど自然体験的な学習や活動に力を入れている。

一昨年度から、「情報活用教育」について研究を深めてきた。子どもたちが、自らの願いを実現するために、身の回りにあふれる情報を集め、選択して活用するという受け手としての活用は、あらゆる場面で行ってきている。そこでさらに、情報を自分だけで専有するのでなく、他者と共有しようと働きかけることが今後大切になってくると考え、自分が得た経験や情報を生かし、他者に向けて自分らしい発信ができる力を育てたいと願って研究を進めてきた。

４年生では「ニュースの時間」の実践を行った。新聞から見つけた記事を切抜き、それをもとに発表したが、新聞記事やカラーの写真を切り抜いて自分なりに読み仮名を振ったり感想をつけたりして、友達に向けて一生懸命に発表する子どもの姿が見られた。

５年生では、理科の天気の単元と関連させ、毎日の雲の写真を一ヶ月間切り抜いて一冊にまとめ、「雲の動きパラパラマンガ」を作った。K子さんは「新聞を切るな！とお父さんにしかられたけれど、わけを話したら協力してくれた。」「新聞は天気のところなんて見なかったけど、その日の空と比べるようになった。」など家族ぐるみでかかわってもらったり新聞の情報を実際の生活に結び付けて考えたりできる子どもたちが増えてきた。

しかし、一方で課題も残った。新聞には小学生に難解な漢字や語句が多く、新聞記事の内容を理解する上で大きなハードルとなっている。また、インターネットでは、調べ学習を進めていくと、珍しいページをたくさん開き、印刷して、分かったような気になって終わってしまうこともある。膨大な情報に飲み込まれてしまったり、教育上好ましくない情報に触れたり、といった問題点もある。

今後、私たちが願っていることは、必要な情報を見極め、体験や経験をもとに「自分の情報」として獲得するだけでなく、他者（クラスの友達・学年の友達・ほかの学年の友達・先生・家族・地域・社会）へ向けて発信していける子どもになってほしいということである。新聞は子どもたちにとってもっとも身近で新鮮で安心のできる、幅広い情報源であると同時に、自分の持つ情報をまとめ、視覚的に他者に伝える上で非常に多くの技法や手がかりを学びとれるものである。そのために、新聞をすこしでも多く教育現場に取り入れて活用していきたいと考えている。

２．新聞活用の環境設定

(1)　ＮＩＥコーナーの設置

高学年昇降口にコーナーを設け、登校してきてすぐに新聞を目にできるようにした。毎日、４年生の子どもたちが新聞を運び、手製の新聞ストッカーにファイルした。基本的にはその場所で読み、必要があれば教室に持っていくこととした。切り抜きたい記事があれば赤線で囲い氏名を明記し、昼までに切り抜いてよいことにした。

(2)　バックナンバーの保管

日曜日から土曜日の１週間は、ＮＩＥコーナーに順次ファイルされていく。
１週間過ぎたものは第２理科室のＮＩＥコーナーに移して保管した。
自由に切り抜いてよいコーナーである。

３．実践の概要

(1)　新聞掲示の活動（４年・始業前）

毎日配られる新聞を、４年生の子どもたちが当番制でＮＩＥコーナーに展示した。
（子どもたちの主体的な取り組み）

(2)　テーマ別ニュースの時間（４年・国語・特別活動・総合）

自分の好きなジャンルの記事を決める。
新聞を選ぶ → 見出しを読む → 新聞の中身を読む → 必要な部分を判別する → 発表の仕方を考えあう → 発表する（定期的な発表）
（人に伝える手立てをかんがえる）

(3)　毎日のニュースの時間（４年・帰りの会）

その日の新聞の中からみんなに知らせたいと思った記事を、自分たちで考えた発表の仕方で楽しく伝える。

(4)　新聞作り（５年・社会科・理科・環境学習）

新聞記事や社会見学などの情報を教師が提示し、それをもとに調べ学習などを進めていく。

(5)　理科クイズでの活用

理科専科による課外時間に行う自由参加の理科クイズに活用
各紙で情報を探す → 集める → 読む → 考えながら書く（発信） → 他の友達の感想を見る（互いの発信の交換）

４．具体的な実践

(1)　毎日のニュースの時間に取り組む子どもたち（４年・帰りの会・国語）

ニュースキャスターからはじまったＮＩＥ活動。新聞記事に興味を持ち始める。

本校では、昨年度から新聞活用教育（ＮＩＥ＝Newspaper In Education）の指定校として研究を重ねてきた。「こども新聞」や「小学生新聞」のような「噛み砕かれたおかゆ」ではなく、「普通のごはん」である一般紙を活用してきたが、小学校４年生にとっては一般紙は普通のごはんどころか、玄米以上の歯ごたえである。

それでも子ども達は果敢にチャレンジしてきた。毎日届く６種類の新聞を、全校児童が利用しやすいように整理しながら、情報に触れる。順番で担当する「ニュースキャスター」を意識しながら、目を引く記事を探し、辞書を引いたりインターネットで調べたりしながら、難しい新聞記事と格闘している。「コンピューター室でインターネット…」が日常化している中で、あえて新聞、しかも一般紙。硬い「玄米」を噛みしめてこそ見えてきたものもあった。

話し手の側から見ると、難しい漢字や用語に苦労しながらも、何とかして伝えようと辞書を引いたり振り仮名を振ったりして工夫を重ねていった。４年生のある児童が「鍾乳洞」の記事を紹介しようとして鍾乳洞という語句を辞書で引いた。「石灰岩が雨や地下水に溶かされて自然にできたほらあなだって。でも石灰岩って何かわからないよ。」

そこで「石灰岩」を調べてみると、「炭酸カルシウムからできている白い粉。」とある。今度は「炭酸カルシウム？」とどんどん深みにはまって本来の目的を見失ってしまうのである。「標高2400ｍ以上の山頂付近で初冠雪」という新聞の切抜きを見て「雪が2400ｍもつもるなんてすごい！」と読み取ってしまう児童もいる。難解な語句のハードルは小学生にとっては想像以上に大きかった。

[新聞そうこで新聞を切り抜く子ども達]

聞き手の側から見ると、最初は「すごいなあと思った」「かわいそうと思った」といういかにも読者の立場での第三者的な感想しか持てなかった子どもたちであったが、活動を継続していくうちに「一度自分の目で見てみたい」「クリスマスの記事を読んで、町が明るくなって、クリスマスが近づいてくる気がして楽しくなってきました」いう実物への願いや感覚をともなう感想がもてるようになり、さらに銀行強盗の訓練の記事に対し「銀行強盗がなくなればこんな訓練をしなくてもいいのに」と、自分のことだけでなく社会全体や皆のことを考えた発言に高まっていった。友達の新聞記事の発表に興味を持って聞く子が多く、自分とはちがった視点で記事を選んだり感想をもっている友達によって視野が広がったようだ。

学校の時間割も圧迫されてきているなかで、困難な活動ではあったがそれを続けていくことで、子どもたちが豊富な情報源としての新聞に価値を見出し、興味を向け始めたことがわかった。

(2) テーマを決め、調べ活動を展開し、発信の工夫をする子どもたち

関心の高まりと、調査隊３チーム結成。

朝の新聞の発表を続けていくうちに、「今日出たニュースにもっと質問がしたい」「詳

しく知りたい」「みんなからの質問に答えられるように調べる時間がほしい」という声が聞かれ、3つのテーマとまとまった時間を作って本格的に調べていくことになる。

鍾乳洞チーム

① 純粋な驚き、感動

新聞に載っていた鍾乳洞の写真の美しさに目を奪われ、「何億年もかかってできた」という記事に感激。詳しく調べてみたいと願った子ども達。

② 疑問　問題意識の芽生え

「こんなのどうやってできるんだ？」「どこにあるの？」「長野県にはないのか？」

③ 情報収集　本やインターネットで調査、パンフレット・写真などを収集。

④ 分析　難しい漢字や用語を辞書で調べて書き込む。

⑤ 発信　壁新聞にしてみんなに紹介。発表会では発表の仕方（台詞の振り付け、ギャグ、衣装など）を楽しく伝える工夫として練りこんで、楽しみながら発表していた。

地球温暖化チーム

① 疑問　問題意識の芽生え

よく聞く言葉だが、地球が暖かくなって何が困るのか分からなかった。それが新聞記事で、地球全体が大変なことになることを知り、防ぐ方法はないのかなど、もっと調べたいと願いをもった子ども達。

② 心配　調査への必然感　自分たちが住んでいる地球のことが心配になってきた。大変なことが起きてるかもしれない。調べたい。

③ 情報収集　本やインターネットで調査、去年よりも植物や虫、動物たちの動きが早いことを知り「やっぱり地球が温かくなっているらしい」

④ 分析　難しい漢字や用語を辞書で調べて書き込む。

⑤ 発信　壁新聞にしてみんなに紹介。（情報の切り貼りに少し感想を添える程度）

ボランティアチーム

① 興味　疑問

新聞記事調べで、ボランティアという言葉がたくさん出ていることに気づき、ボランティアってどんなことなのか、自分たちにもできるのか調べたいと思った子どもたち。

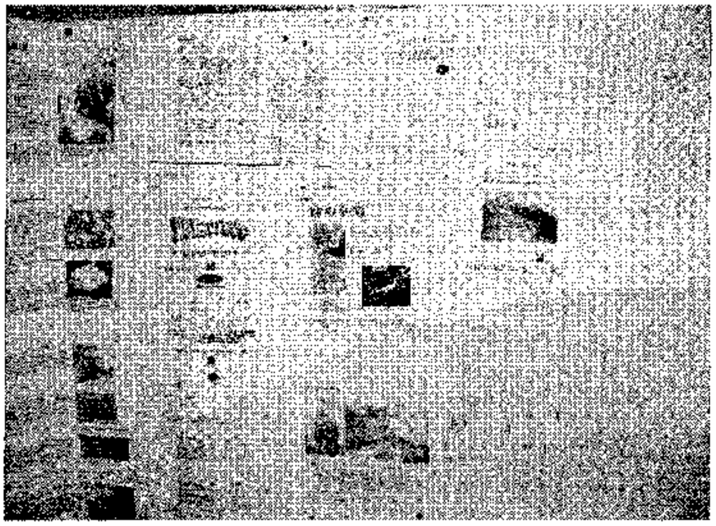
② 調査　本やインターネットで調べ

③ 発信　壁新聞にして紹介。

④ 行動化　ボランティアとは何かを調べているうちに、紙くずが無駄に捨てられている現実を感じて、チームの追究の方向が変わった。

私たちのクラスからたくさんの紙がごみとして捨てられている。学校からはもっと多くの紙が捨てられている。この紙をもう一度自分たちの手で紙として再生させることができないだろうか。　紙を再生させる　→　資源を有効に使う　→　地球に優しい

三つのチームに分かれて、関連した新聞記事やインターネットで調べ学習を深め、一学期末には、壁新聞にして発表会を行った。何枚にもわたって、いろいろな情報が満載された力作がそろい、互いに「よく調べたね」という達成感につつまれた。「自分たちで調べることは楽しい。」「調べるとすごいことまでもわかるんだ。」という実感が持てた。しかし、子どもたちは、新聞の切抜きを「遠い世界のお話」のようにとらえているところがあった。「へえ」「すごいね」で終わってしまうのである。情報を情報として処理するだけの状態ともいえる。


[カラフルで立派な壁新聞になったが…]

(3) もっと調べて発信したいと願った子どもたち

情報を自分のものに！さらなる発展へ

1学期末の発表会は終了した。友達の質問にも辞書をにかいてあることを読んで答え、言葉では互いに何となく分かったような気になって終わっていた。3テーマとも子ども達にとっては学校生活とはあまり馴染みのないテーマでもあったので、2学期子どもたちはもっと身近な新たなテーマに移って調べ学習を始めるだろうと担任は考えていた。しかし、子どもたちは、1学期と同じテーマにこだわっていた。

一生懸命調べたけれど、質問されても「そう書いてあったから」としか答えられなかった発表会に、物足りなさを感じていたのである。時間をかけてインターネットで調べても、素晴らしい画面を呼び出しても、カラフルに印刷して切り貼りしても、それはあくまでも知識の紹介であって、本当に自分たちが「わかった」ことではなかった。「切り取ってきた文を読むだけでは、本当に情報を人に伝えることにはならない」だから質問されても、辞書的な回答しかできなかった自分達に納得していなかったのである。

そんな気持ちを抱いた子ども達は、もっとみんなにも納得してもらえるような調べ学習をしたいと願っていた。そのために、もっと自分たちの体や五感を使って取り組み、まず自分たちが納得できるような活動を考え出していった。

質問 「石灰岩っていったい何だかよく分からない。」
答え 「だからさあ。動物の骨とかが、溶けて固まってできたんだよ。」
質問 「でも骨って、化石とかになるんじゃないの？それにさあ、恐竜の骨も残っているじゃん。岩にならないで残ってるじゃん。どうして石灰岩になるの？」
答え 「・・・・」(窮する。)
質問 「二酸化炭素ってのもよくわからないよ、やっぱり」
「温室効果ガスとかオゾン層も」
質問 「温暖化ってどの位してるの？」
答え 「1年に2．5度高くなってる」

質問　「えー！そんなに？じゃあ２年したら５度高くなるの!?」
答え　「最高気温が高くなるってことだよ」「でも高くなってるんだよ。本で見た。でも何度高いかはよく分からない」
質問　「だんだん暑くなて来てるって感じる？」
答え　「思う！」「だって前よりも暑いって言ってるよ。お父さんとか。」
教師　「自分でもそう感じるの？」
答え　「あんまりわかんない」「おれ地球温暖化チームなのに、そう思わないや」

⑷　新たな発信にむけて、課題を決めだす子どもたち

鍾乳洞チーム

石灰岩のできる仕組みを、とても丁寧に詳細に調べ、わかりやすくパネル化したのに、わかってもらえなかった。自分たちも実はよくわかっていないことに気づいた。貝殻や骨が本当に石灰岩になったり、その岩が本当にとけるのだろうか。言葉での理解ではなく、実際にその様子を確かめてみたい。

地球温暖化チーム

温暖化の原因になる二酸化炭素を減らしてくれると知って、自分たちでケナフを植えた。でも「ケナフは本当に二酸化炭素を吸収してくれるのか。」という疑問。しかしそれに応えてくれるような情報が見つからなかった。この目で見ないと納得できないし、友だちにも伝えられない。

ボランティアチーム

紙を集めたり、ちぎったり、水の中で溶かしたりする活動自体は楽しい。
インターネットや本などには、牛乳パックなどを原料にした方法は出ていたが、通常の紙からの方法は調べられなかった。自分たちが作っている紙は、紙として本当に使えるのか。ほかの人の目から見て、使ってもらっての感想を知りたい。そのために紙をはって展示するのじゃあダメ。触ったり、折り曲げたりしてほしい。自分たちの苦労も伝えたい。

新聞やインターネットから持ってきた情報は、そのままではただの文の切りとりに過ぎない。自信を持って他者に伝えたり、発信したりするためには、文の切り取りのままではだめだ。

↓

どうすれば、生きた情報になるのか

自分たちが得た情報を、自分たちで体験することを通して、より具体的な実感として伝えられるような「自分たちの情報」として発信することが、生きた情報となる。

⑸　生きた情報に高める子どもたち

実際に活動してみると、学年を越えた内容が含まれており、解決できない問題に直面した。困った子ども達は、日頃から何かと世話になっていて、分からないことがあるといつも頼りにしている理科専科の先生にも相談しながら、２回目の発表会にのぞんだ。

①鍾乳洞チーム：家で食べた貝殻を大量に集め、すり鉢で時間をかけてすりつぶし、粉にした「石灰のもと」を作って、それを固めて「石灰岩」にしたりしながら、実験を繰り返した。作り方はわかったが、実際にやってみると、うまくいかないことが多い。その苦労を通して、自然の力のすごさ、長い年月ということの意味を実感した子ども達。前回は言葉での説明だけだったが、発表会では、その実感を伝えるために、手作りの実験装置による実演を行い、自信をもって発信することができた。

[本当にケナフはCO_2を吸ってくれてるの？]

②地球温暖化チーム：ケナフが本当に二酸化炭素を吸っているかどうか、試行錯誤で装置を作り上げ、実験した。一回目の実験では、装置の不備で空気が漏れてしまって、思うような結果がでなかった。子ども達は自分たちの願いを込めたケナフがそんなはずはないと、装置を改良し、いいデータが出るように粘り、ついに目で見える形で二酸化炭素の減少を確かめることができた。その様子を友だちに具体的に伝えることができた。

③ボランティアチーム：クラスで捨てられていた雑紙を回収して、手作りのリサイクル紙を作った。試作品を友だちに見てもらって、もっと手触りがよくて使いやすい紙を目指し、試行錯誤しながら改良を重ねた。発表会では、ミニ体験教室を開いて、作る楽しさや溶けた紙の原料の気持ちよさを友だちと共同体験することができた。

5．成果と課題

新聞の記事の切抜きから始まったこの活動によって「切りとってきた文章を、経験や体験と結び付けることで、具体的な実感をともなった自分たちの情報として他者へ発信していくことができる」ということを子どもたちから学んだ。

[この楽しさを一緒に感じてもらいたい…]

子どもたちの世界は狭く、テレビを通して与えられる仮想的な知識が情報源のほとんどを占めている。新聞をきっかけに子どもたちが新しい世界に出会い、実物とかかわって活動につなげていったことで視野が広がり、自分と現実の社会とのつながりがもてたと考える。自分が実際にやってみて楽しかったことは、人にも伝えたくなるものである。今後、この素直な気持ちを発信への願いに高めていきたい。

資料1

調べてみよう（地球温だん化）チーム

名前（舟津海　）

○みんなで（チーム）調べていくこと

このまま地球が暑くなっていったらどうなるのか。

○魚や植物もひがいをうけるかな。

○北きょくの氷がとけたらペンギンやしろくまはどうなるのか。

○その方法は？

本や新聞記事を見て調べる

パソコンがある人はインターネットで調べる

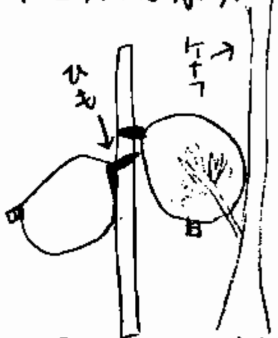
テレビを見て調べる

○自分の役割（やること）をかくにんしよう

10月9日(水) 実験の様子

①まず理科室でふくろをつくりました。（2つ）

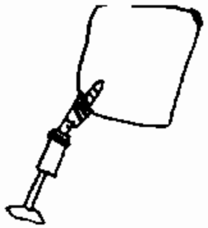
②ケナフにふくろをかぶせました。にせケナフはぼうにつるしておきました。



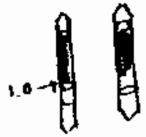
③ストローのところに口をつけて「スーハー」と十回くらいふくろの中でいきをしました。

④じしゃくでストローの先をはさみました。

⑤また、じしゃくをとって、ガステックで二さんかたんそのりょうをしらべました



⑥二さんかたんそのりょうは両方とも1.0でした



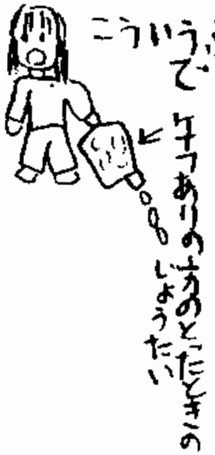
⑦かんばんをつくってたてました。

⑧かんばんをたてにいったとき、本物ケナフのふくろに水てきがついていました。

使ったもの
ガステック、はさみ、ストロー、じしゃく、ふくろ
紙、プラステックのいた、はりがね、ぼう、
セロテープ、二さんかたんそをはかるぼう、ひも

地球温だん化チーム　ケナフ実験　10月11日(金)

実験は少しせいこうしました。
ガスティックではかってみたらケナフなしもケナフありも二さん化炭そがへっていました。「少し空気が出てっちゃったのかな」と思いました。ケナフなしの方は0.3くらいで、ケナフありの方は0.1か0.2の二さん化炭そが入っていました。実験をはじめたころは1.0だったので、2つとも二さん化たんそがへっていました。でも、ほんの少し、ケナフありの方がへっていたので、はたこし先生が「実験はせいこう」といってくれました。あと、ケナフありの方に水てきがものすごくついていたので、ケナフがなにをしたのかなとふしぎになりました。

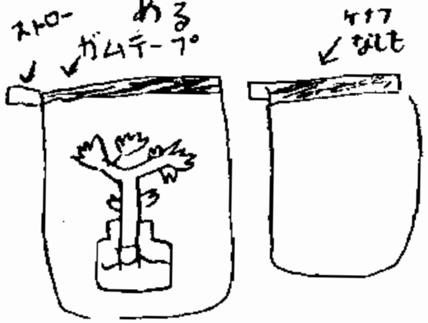


こういうふうにもっていたら水がたらたらでてきました。

ケナフ実験　10月18日(金)

① ケナフを1本だけ切ってきて、ビンにさす。

② ふくろをかぶせて上の方をしっかりとめる

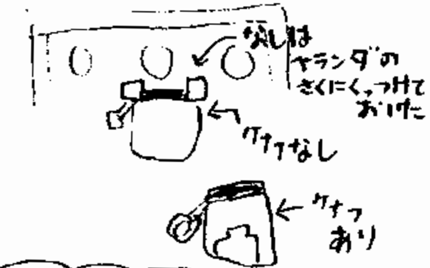


③「ふー」とすったりはいたりをくりかえす(10回くらい)。

④ ガステックではかる(両方とも1.5)

⑤ じしゃくですばやくストローをはさむ

⑥ ベランダにおいておく



⑦ 5時間半ご(ほうかご)ガステックではかったら、ケナフなしは1.5で、ケナフありは0.1だった。

実験2回目大せいこう

反省 前は2日もたってからはかったからあまり差がなかったけれど、今回はものすごく差がついてよかった

使ったもの ガムテープ、じしゃく、ガステックはかるぼう、ビン、ケナフ、はさみ、ふくろ、セロテープ(すこしやぶれたから)、ストロー、水、かんばん

資料 3

平成14年度　**りかクイズ25**　H15・3

2ねん 2くみ　なまえ 永井さおり

どうぶつ写真コンテスト！！

あなたが「これはいい！」とおもったいきもののしゃしんを、しんぶん、こうこく、いらなくなった本、インターネット、ふるいカレンダーなどからきりとってはりつけてきてください。おうちの人にきいてきそうね

冬よさよなら 北帰行

犀川 白鳥湖

移動性高気圧に覆われ晴れ上がった二十八日未明、南安曇郡豊科町の犀川白鳥湖で越冬していたコハクチョウの北帰行が始まった。開始日は昨年と同じ。まだ暗いうちに、白鳥湖から六十六羽、下流の東筑摩郡明科町の御宝田遊水池から四十六羽が、約四千㌔離れたシベリアへ旅立った。

湖の近くに住む「アルプス白鳥の会」会長原とみ子さん（六七）によると、午前二時五十分から三時すぎに幾つもの群れが舞い上がり、別れを惜しむように鳴きながら旋回。「次第に高度を上げ、暗い北の空に鳴き声が消えて行きました」。"夜行便"は、その後も明るくなるまで続いた。

同会によると、今冬、安曇野で越冬したコハクチョウは千八十六羽。三月下旬までにすべて飛び立ち、安曇野に本格的な春が訪れる。

北帰行が始まり、飛ぶ練習を繰り返すコハクチョウ＝28日午前6時50分、豊科町の犀川白鳥湖

Ⓒウシガエル

読売新聞　2003年2月1日　朝刊

自分で調べる意欲わく

国語で記事の要約と感想発表　北小学校（上田市）

「ニュースキャスターの○○です」。四年一組の国語の授業は、ニュースキャスターにふんした児童のあいさつから始まる。

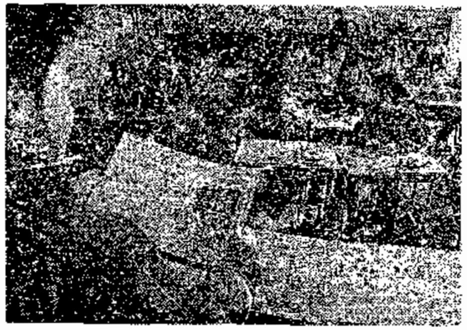
「一九九〇年代に大ブームだった電子ペット・たまごっちの新商品が発売されることになりました」。この日のキャスターが取り上げたのは、数日前の新聞記事だった。

キャスターは記事の要約と感想を発表。視聴者役のほかの児童たちは記事の内容について意見を言ったり、新聞記事の見出しを想像したりする。校内に設けた情報活用教育研究部会主任の万年康男教諭は「『四年生になったらニュースキャスターになるんだ』という気持ちがあったようです。まだ読めない漢字も多いようですが、家の人と一緒に読むなどしてめげずにやっています」と話す。

昨年度と今年度、NIE実践校の指定を受けた。「新聞からは学年に応じた情報が得られる。子どもたちに新聞に親しむ機会を与えたい」（田畑和秀教諭）と、新聞を積極的に教育現場に取り入れている。

四年一組では、キャスターが取り上げたテーマの中で「鍾乳洞」「地球温暖化」「ボランティア」の三つが、「総合的な学習の時間」で図書館やパソコンを使っての〝調べ学習〟に発展した。担任の内山美穂子教諭は「最初は記事を紹介するだけの子が多かったが、今は大きな変化を感じています」と話している。

4年1組・橋詰美咲さん　学校でニュースの発表を始めてから、それまであまり読まなかった新聞を読むようになりました。福祉の話題が好きで、新聞記事を読んだのをきっかけにボランティア活動も始めました。



ニュースキャスターになって記事の内容や感想を発表する児童

はつらつNIE
教育に新聞を

NIE（エヌ・アイ・イー）は、学校教育の教材として新聞を活用していこうという運動で、「Newspaper In Education」（教育に新聞を）の頭3文字を取って、こう呼んでいます。県内でNIEに取り組んでいる学校を紹介します（毎月第1土曜日に掲載）。